

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2016年4月9日

文責：JUN

## 仲間から学ぼうとする子どもを育てる

### 1 どう授業するかの前に

学ぶのは子どもです。アクティブ・ラーニングが登場したいま、わたしたち教師はいつそうこのこの意味を噛みしめなければなりません。

これまでの授業研究は、どちらかと言うと、どう授業するかの研究だったように思います。もちろん、授業は教師によってまるで異なるものになるわけですから、どう授業するかをないがしろにすることはできません。しかし、授業をそのように教師の側からだけ考えていたのでは、子どもが学ぶ学びを実現し深めることはできません。子どもが学ぶ学びは、子どもの側に立って考えることを除いて実現することはできないのです。

子どもは一人ひとりばらばらでは学ぶことはできません。「学」という漢字はかつて「學」でした。この旧字の上の部分を見てください。左右に配置されているのは「手」です。そして真ん中の二つの「×」は人とかかわりを表しています。つまり、漢字が生まれた時代から、学びは、他者から添えられた手によって、他者とかかわることによって生まれるものだと考えられていたのです。

学校教育には、一人ひとりの学力を向上させるという名目で他者を頼らず自力で頑張るように仕向ける傾向がなきにしもあらずですが、それは逆に子どもを学べなくする危険性をはらんでいます。本当に豊かな力をつけている人は、どんな職業、どんな分野でも、他者から学んでいます。わたしたちが「学び合う」子どもにしたいと考える所以はそこにあります。学びを豊かにするためには、一人ひとりの努力も必要ですが、仲間とともに学び合うことが不可欠なのです。

それには教師が「学び合い」のある授業をしなければなりません。学びとは教師に教えられるまま個人個人別々に身につけるものではなく、仲間とともに探究し発見するものだとすべての子どもが思える授業にしなければなりません。教師のこの授業観の転換が子どもの学びの深まりの鍵を握っています。

しかし、子どもの「学び合う学び」は、一つひとつの教材、一時間一時間の授業に対する教師の努力と意気込みだけで実現できるものではありません。笛吹けど踊らずということばがありますが、子どもに学びを深めたいという意欲、そのために仲間と学び合いたいという意識が宿っていなければ、どれだけ教師が躍起になっても「学び合う学び」にはならないのです。つまり、学ぶのは子ども、学び合うのは子どもなのですから、その子どもが「仲間から学ぼうとする子ども」になっていなければ何事も始まることはないのです。

わからないこと、困っていることがあったら仲間尋ね、尋ねられたら親身になって寄り添って考

え、難しい課題に向き合うときは仲間と夢中になって探究する、教師に指示されなくても、あたり前のようにそれができる子どもになっていなければなりません。人間にはもともと他者とのつながりを求める思いがありますから、子どもがそうなることはさほど難しいことではないように思えますが、現実にはそうになっていないことのほうが多いのではないのでしょうか。わたしには学校の環境が子どものその思いを封じ込めてしまっているように思えます。

教師は、封じ込められている他者を求め他者と学び合いたいという子どもの欲求を解き放たねばなりません。仲間を求めてよいのだ、仲間に頼ってよいのだ、仲間から学ぶことで豊かになれるのだという安心感を生み出さなければなりません。それには、教師が教室の中でどのような言動をとるか、子どもたちにどう接するかが極めて大切です。子どもたちの価値観は、その学級・学校の日頃の活動、毎日毎日の教師のかかわりの蓄積によって少しずつ少しずつ育っていくものにちがいないからです。教師は、自らの授業の転換を図り、子どもによる学びが実現する授業づくりを心掛けながら、仲間から学ぼう、仲間を支えよう、仲間とともに学びを深めようとする子どもを日常的にはぐくんでいくことを忘れてはならないのです。

新年度が始まりました。子どもも教師も期待に胸膨らませるこの時期は、意欲的な取り組みを始めるチャンスです。子どもの新年度に対する高揚感を生かせば、「仲間から学ぼうとする学級」への道筋をつけることができます。忘れてはならないのは、その学級、教師の学級づくり、授業づくりは新しい一年が始まる学級開きのその日から始まるということです。その一日一日の経験が価値観と学び方、学びの作法になるということです。ですから、追い追いその方向でやっといこう、などとのんきなことを言っていてはなりません。歩き始めたその日から、その日その日の出来事に対応しながら、どういう道歩んでいるかという認識をもって、ゆくえを見定めながら粘り強く、子どもとともに進んでいくことです。

ここに述べる何項目かの事柄は、そんな皆さんの取り組みで何が必要なのか、大切なことは何なのかを概括的に記したものです。こうした概括的なことがわかったら、どの教室も「仲間から学ぼうとする学級」になるわけではありません。大切なのは、この項目をどれだけ具体化するかです。先生方一人ひとりに合うように、子どもの状況に合うように、その教室の状況に合うように、皆さん一人ひとりがつくり出すことです。そうでなければ、生きてはたらくことはありません。わたしがお伝えすることは、そういう皆さんの取り組みのきっかけになり、考え方の確認にさせていただくためのものです。

どうか、丁寧に読んで考えてみてください。そして、これら一つひとつを皆さんなりに実行に移してください。やってみたら思うように行かないということが出てくるでしょう。実践とはそういうものです。計画や理念と現実とはそんなに簡単に一致するわけではありません。大切なのは、現実に持ち込んだときにどれだけ悩み、考え、その現実にぶつかって、自らつくり出す努力をするかです。困難なことが起きたら、その困難に立ち向かってさまざまに取り組んでみてください。その結果、現実に応じた道を開くことができたなら、そのとき、わたしのお示しした項目では表しきれないものを手にされることになるでしょう。わたしが記すことがそのように活用されることを心から願っています。

## 2 仲間から学ぼうとする子どもを育てるために

### ① 学び合う大切さを強く打ち出す

子どもは教師のことをよくみています。自分たちの先生が何を大切にしているか敏感に感じ取っています。それだけに、「学び合う教室にしたい」「学び合うことで一人ひとりみんなが安心して学べる学級にしたい」という願いが、言葉だけではなく教師の意志として子どもに伝わったとき、子どもはその願いに応えようとします。

### ② 学び合う場を多く設定する

子どもが教師の「願い」を単なるスローガンではなく本当にそうなのだと感じるには、そう感じるだけの具体的な体験が必要です。学び合いの体験です。低学年ならペアを頻繁に取り入れましょう。中学年以降はペアだけでなくグループで学び合うようにしましょう。もちろん、全体学習でも聴き合い・学び合うことができるよう心がけるのは当然ですが、それよりも少人数で学び合うペアとグループを多く行うほうが協同的に学ぶ良さに早く気づけます。

### ③ わからないことがあったら尋ねる習慣をつける

教師からペアやグループでという指示があったときだけでなく、わからなくなったり困ったりしたときはいつでもだれか（基本はペア学習の相手である隣の席の子ども）に尋ねるように仕向けます。「どうしてそうなるの?」「これでいいの?」「わからないよー、教えて」という仲間への語りかけは「学び合う教室」においてもっとも大切にしなければならないことばです。もちろん、他の子の迷惑にならないような声量と態度でという「学びの作法」を指導しなければなりません。教室のあちらでもこちらでも、そうした子どもによる自発的な学び合いがしつとりと生まれるようになると、子どもたちの学ぶ意欲は飛躍的に高まっていきます。こうして、どの子どももわからないことをそのままにしない学級、仲間のわからなさを尊重し丁寧に温かくかかわることのできる学級が育っていきます。

### ④ 子どもの考えを大切に受けとめる

「学び合う学び」に取り組んでこなかった学校においては、学習は先生の指示通りに行い、教えられたように理解していくものだと思い込んでいるかもしれません。そんな子どもの学習観を、自分たちでいろいろと考え取り組み発見する学びに転換しなければなりません。それは容易なことではありません。しかし、自分たちで発見する学びの面白さを一度でも体験すると、学びに対する子どもの表情は一変し、そういう学び方を心待ちにするようになります。そうなるには、教師が教え急がず子どもに考えさせなければなりません。そして、そ

こから生まれ出る子どもの考えを、大切に期待を持って聴き、そこから学びを構築しなければなりません。この教師の聴き方、受けとめ方が「学び合う学級」を育てるうえでとても大切なのです。教師が聴けない学級は、子どもも聴けるようにならず、学び合う教室にはならないということを教師はいつも心に持っていなければなりません。

#### ⑤ **子どもの考えをつなぐ**

「学び合い」による学びの深まりは互いのことばに耳を傾け合うことから生まれます。ここでは、先入観にとらわれたり、自分の考えに固執したりしてはなりません。どんな考えも尊重する聴き方をしなければなりません。そして、聴いたことに対する自分の考えを届なければなりません。子どもの学びは、そういう聴き合いによる「対話」によって深まっていくのです。

それは、子どもの考えと考えの「つなぎ」です。聴き合うということは互いの考えを「つなぐ」ということなのです。わたしたち教師は、教室を「つなぎ」が存在する場にしなければなりません。それには、教える、わからせるということよりも、子どもの考えのつながりをつくり、子ども相互の「対話」による学びを生みだすように仕向けなければなりません。ことば数の多いよくしゃべる教師はほとんど「つなぎ」をしていません。教師がつなごうとしていない教室に「学び合い」は育ちません。

#### ⑥ **常に仲間から学んだことを意識させる**

だれからどういうことを学んで、自分の考えがどうなったかを子どもたちに意識させると、「学び合いよきもの」という思いが強くなります。それには、日常的に、学び合った事実の振り返りをさせるとよいのです。授業の最後に感想や振り返りを書かせている教師は多いと思いますが、単なる学習のまとめになっているのではないのでしょうか。それでも悪くはないと思いますが、前記のような学び合いの事実を書かせるのもっとよいのです。書かせるだけでなく子どもの文章をプリントにして読み合うとなおいいです。子どもは、自分で書いたり仲間の書いたものを読んだりすることで、自分たちがどれだけ仲間から学んでいるかを自覚していきます。

#### ⑦ **学びの質を上げる**

子どもは、もうわかっていること、やさしいことには夢中になれません。やや難しい目の課題に挑むとき、意欲的になり夢中で取り組み始めます。すぐには解けない課題だからこそ、魅力を感じそれを征服したいという意欲がわくからでしょう。しかし、その教科を苦手に行っている子どもにとっては、課題のレベルが上がれば上がるほど困難を伴うこととなります。だから仲間との学び合いが必要なのです。見方を変えれば、「学び合う学び」は課題の難度が上がったときこそ真価を発揮すると言えます。子どもに目的意識があり、その目的達成のた

め本気で学び合おうとするからです。

レベルの高い課題に挑む「ジャンプの学び」は、学び合える子ども、学び合える学級になっていないと十分な成果を出すことはできないのですが、逆に、「ジャンプの学び」に挑む体験をすることで学び合える子ども、学び合える学級になっていくとも言えます。教師は、このことを肝に銘じ、教材研究を深め、魅力的な課題を子どもの前に提示しなければならないのです。

## ⑧ **学びの作法を定着させる**

「学び合い」は一人ひとり別々に行う行為ではありません。学びの深まりを目指し、周りの仲間とともに、互いの存在を大切にしながら行う行為です。つまり他者との協同的行為です。ですから、そこには、仲間とともに学ぶための守るべき「作法」があります。それは、教師の都合によって定めるいわゆる「学習規律」ではありません。子どもがしっかり学び合うための約束事です。仲間の考えを聴くときはこういう聴き方をしよう、考えのつながりをつくるように語ろう、ペアやグループになったらこういう学び方をしようといった、学び合い方、それが「作法」です。教師は、それら一つひとつの意義を子どもたちにわかるように設定しなければなりません。子どもたちがそのようにしたいと思えるように定着させなければなりません。こうした「作法」にのっとった学びを蓄積していくことで、仲間とつながる大切さ、仲間を支え支えられる良さを実感し、その結果、自分の居場所と学びの確かさを獲得していくにちがいません。

## ⑨ **子どもの学び合い、学びに向き合う教師としての事実を振り返る**

だれからどういうことを学んだかを書いて振り返ると、子どもたちの「学び合い」に対する意識が高まるということを前述しました。しかし、それは子どもだけのことではありません。むしろ教師こそがやるべきことです。どの授業のどの課題のときに、子どもたちからどういう考えが生まれ、それがどのようにつながり合って深められていったか、または、深まりがつかれなかったのはどの子どものどの考えを見逃していたからなのか、教師である自分が、そうした子どもの考え、子どもの「学び合い」の実像がみえていたのかみえていなかったのか、その事実を一人ひとりの子どもを思い浮かべながら、子どもと子どものつながりを思い起こしながら振り返るのです。もちろん、子どもにそうさせたように、教師も記述することです。書くことにより、振り返りが鮮明になり、良さも課題もみえてくるからです。

振り返りは一過性のものにしないよう何度も行うようにしたいものです。そうすれば、子どもたちの「学び合い」も、それに向き合う教師としてのありようも、点ではなく線でとらえることができます。そのことにより、さらに今後どのように取り組んでいけばよいか見えてくるでしょう。「仲間と学び合おうとする子ども」は、子どもと学びの事実をみつめるこうした教師の地道な営みによって実現していくのです。

### 3 確固たるビジョンの下

授業が「学び合い」になったとき、子どもたちの発言は決して羅列になりません。仲間の考えを聴く表情も多彩になります。自分の考えとの共通性を見出したときは微笑み、自分が考えていなかったこと、気づいていなかったことをだれかが出してきたら目を丸くする、そして、自分の内に生まれた考えを伝えようとします。つまり、聴き合うことによって子どもの考えが連鎖するのです。そういう意味で、学び合っているかどうかは子どものことばのつながりと表情を見ればわかります。

発言量はかなりあるのだけれど、考えと考えのつながりがほとんどない授業があります。子どもたちは、発言しただけで、自分の考えを先生に聞いてもらえただけで満足しているようです。そこには、仲間の考えと自分の気づきを擦り合わせて、そこからもっと学びを深めようという意識はないのです。それは「学び合い」ではありません。そういう授業の子どもの表情はあまり変わりません。皆さんが受け持つことになった今年の学級はどうでしょうか。ことばのつながりはあるでしょうか。仲間の考えを聴くとき表情が生まれているでしょうか。

「仲間かの考えから学べる学級」にしたいと思っておられる皆さんですから、もし今度の学級がつながりのない状態だったら、さてどうしていこうかと考えておられるでしょう。子どもの聴こうとする意識、つなごうとする意識をどのようにしてはぐくんでいこうかと考えておられるでしょう。ひよっとすると、まずは、教師である自分がつなぎの役割をしなければと考えておられるかもしれません。「〇〇さんの考え、どう思う？」などと尋ねて子どもの考えのつながりをつくり、次第に教師がはたらきかけなくてもつなげる子どもにしていこうと考えておられるかもしれません。そういう教師の介添えで子どもたちもつなげていくとはどういうことか少しづつわかっていくでしょうからそれは妥当な策です。

けれども、そういう手を打つとしても、そこに教師のどういうビジョンがあるかで現実はまだでちがったものになるでしょう。わたしが考える教師に必要なビジョンとは、「仲間から学ぼうとする子どもを育てる」というものです。教師がどれだけ躍起になって取り組んでも、授業を工夫しても、子どもにそうしたいという意欲がなければカタチだけのものになるからです。「アクティブ・ラーニング」の「アクティブ」は子どもから生まれ出るものでなければなりません。

仲間の考えに立ち止まれる子どもは、よく聴く子どもです。よく聴くということは、仲間の考えがどういうものか考えながら聴き、自分の考えと擦り合わせ、テキストの味わいや課題への探究を行っているということです。そういう作用が一人ひとりの子どもの内で起きているということです。

本号でわたしが記した何項目かは、仲間の考えに反応して学び合える子どもにするためのポイントです。ただ、これはあくまでもポイントでしかありません。このポイントをどう具現化するかは、まさに先生方一人ひとりの工夫ある実践にかかっているのです。

どういう教材を、どういう考え方で、どういう指導過程で、どう課題提示をして、どういう学習活動を組んで授業するかと考えることも必要です。けれども、そういう単発の授業づくりだけで学び合う子どもにはならないのです。確固たるビジョンの下、継続的・持続的に、常にその経緯を振り返って次への展望をつくっていく普段の取り組みで「仲間から学ぼうとする子ども」を育てない限り、豊かな「学び合う学び」は生み出せないのです。皆さんの本年度に期待しています。